

第二期 第二十六号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2018.09.20 定有堂書店 発行

店頭雑話

旅について

焼きそば探偵と私

見えない

聞いて・見て・感じて・書く

黄金の時よ、珠玉の日よ

8月の日記

今の若者が文章を綴れないのは

酔芙蓉

神戸外国人墓地

鳥取あれこれ その二十五

延びて来た手

フレンチ・トースト

賽銭箱

Hoarder

…… 編集後記

奈良 敏行

坂本 修一

麻野 嘉史

スザワマリコ

芝野 浩貴

△ラカミヒロミ

齊藤 仁昭

うしきのどか

五百川 知子

山本千津子

内田 克彦

秦阜 梅林

あきの素生

伊達 文

土質 啓三



## 店頭雑話

奈良 敏行

(定有堂 店主)

店頭で、浜田浩之さんとの雑談の折に、完全に仕事から身を引いたら、どうするの? と尋ねてみた。唐突な話だが、直前には、近くのコンビニとか、少し離れた大きな書店が閉店するとか、そんな「下り坂」の話題が交わされていた。つまり「後生」の話だ。浜田さんはもともと浮世離れた人で、「引退したら、もちろん本を読んで暮らすよ」と屈託なく答えた。

そういえば、個人図書館のように本を蒐集する方が何人かいて、その一人の方がある日、店頭で友人と出くわし、友人が「いつも本をたくさん買ってるようだが、よく読むヒマがあるな」と感心していた。高い地位にある多忙な方なのだ。するとその人は自然体で、「いや引退してから読むために、いま集めているだけだ」と闊達に笑っていた。「後生」を見据えているんだ、と敬愛の念

を深くした。

無為の場所で、無為自然に行う「読書」の風景に胸がときめくのを感じた。

本屋をはじめた数年は本を読まなかった。働くことと本を読むことは両立しないと思えたからだ。街に出るためには書を捨てなければと本気で信じていたのだろうか。どういう読書をやめたの？と聞かれれば、「理想と現実がくいちがつっていたら、どうするか？」という問いのもどに行う読書、と答える。これは無用の読書で、狼疾という言葉をしつたとき、そんなものだと思った。思考は言葉の文脈のくびきの下にあるとはよくいわれる。こう問われたら、「理想」をとると言わざるを得まい。

でも、本屋をはじめて二年ほどしたとき、「当然現実が大事」と迷いなく答える人と出合つて驚いた。『死の中の笑み』という著書が世に現れた瞬間だった。ここでは「現実」が「日常」と読み替えられていた。導かれて少しずつ日常の可能性に軸足をおいた読書を始められるようになった。

先日ある版元の人に、『なぜ世界は存在しないのか』という本がこれからの読書シーンをリードするよ、と教えられた。こういう示唆は、狭く生きているわたしの心底にとても響く。この本への入口はなんですか？と尋ねると、「わたしたちに対して現れている世界と、本当に

存在している世界とが違っていると考える気がなるかならないか」です、という。猛暑の八月はこの本を読むのに日を費やした。

「世界」の中にいて「世界」の外をどうやって知るのだろうか？この事がいつも気になってならない。

店頭の読書の地軸もある日突然変わる。新刊があまり売れないので、考えあぐねた末、良書が収められていると考えられる文庫の目録から、丹念に拾い集めてみた。目指すところは「文庫で森羅万象」作戦だ。一冊ずつすべて面出しにする。ちくま文庫が断トツに売れているのに気がついた。何が売れるかは自分を超えた世界だ。だから脈絡をつけずにランダムに並べる。後はデータにきく。わたしたちは世界の外を知ることにはできないが、世界の外に触れている。データもそのひとつだ。上位の本は『かわり方のまなび方』『自分の仕事つくる』『ナリワイをつくる』『半農半Xという生き方』『自分をいかして生きる』だった。年齢にかかわらずなく幅広い層が手にしている。

「居所を求める」、が一貫するのではないだろうか。

『世界はなぜ存在しないのか』の中に、「存在する」とは「何らかの意味の場のなかに現れること」とある。

「意味」とは「対象が現象する仕方のこと」だ。

無為自然の中でも、存在するためには、意味の場を必

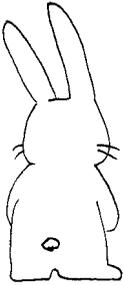
要とする。それが「ナリワイ」をつくる、ということだろうか。森羅万象の中に帰っていくために、どんな「意味の場」を持てばいいのだろう？ 街の中でも「縮小」がテーマとなっていると感じ始めたこの夏だった。

2018. 08. 18

### 猫風閣ギャラリー



・ 次頁 「旅について」の著者直筆イラストです。→



# 旅について

坂本 修一

(猫風閣主人)

二冊の旅行記がある。

一冊は小田実の『何でも見てやろう』、もう一冊は石森延男の『バンのみやげ話』だ。

前者が旅行記であることは論を待たない。後者については、旅行記と呼んでよいかどうか疑義を挟む人がいるかもしれない。旅行者の名が「バン」と設定してある物語、童話、詩篇で構成されているからだ。しかしここでは、後者も旅行記とする。

\*

二冊は対照が鮮やかだ。

前者は現実的で合理的な随想でもあり、後者は詩的叙情性に富むメルヘンだ。

前者が社会の底辺をも見ながら留学帰りに若者が一年

かけておこなった貧乏行脚であったのに対し、後者はフルトで開催された第三〇回国際ペンクラブ大会に参加した地位ある大人がそのついでにおこなった一六〇日間の外遊だ。

たどったコースも全く逆だった。前者の著者はフルブライト留学生として一年間アメリカ合衆国で生活したあと、イギリスを起点に、ヨーロッパをほぼ北西から南東に移動し、中近東、インドを巡っている。後者は、イスラエルをスタートし、ギリシャ、エジプトを経てヨーロッパをほぼ北西に向かって巡歴している。

\*

経緯や移動コースの対照は際立つが、旅行が行われたのはどちらも一九六〇年ごろのことだ。知悉せぬ者が時代の特性について触れることの愚は避ける。ただ、血気盛んな若者と長年教科書編纂等に携わってきた大人が、同時期に重なる地域を旅して、大きく異なるものを残したことを思う。

二人は一九三二年と一八九七年の生まれで、歳の差は三十五年だ。一世代である。生み出すものに差異があつて当然だ。見ようとしたものもともと違っていたということもあるだろう。

そして前者は時代を風靡し、今なお版を重ねている。後者は重版数において前者にかなわない。

\*

二冊の優劣について述べようとしているのではない。前者の著者はあとがきで「象徴的に言えば、思想が本のかたちでまとめ上げられるものでないこと、そこから大きくはみ出たものであること」と書いている。思想を文章で伝えることの限界を述べ、行動し、体験して考えることの重要性を伝えている。

後者の著者はあとがきで「『バンのみやげ話』はそのときの心の絵なのです。これを読んだ妻と娘は、月の夜のお話が多いといいました。」と書いている。あくまで抒情的だ。経験を情緒的表現に置き換えて伝えている。

\*

旅をすれば、日常を離れた情緒に浸れることはまちがいない。一方、移動や支払いをはじめ、きわめて現実的で合理的な経験もする。

そもそも旅に出かけるためには力が必要であり、情緒だけで旅を続けられるものでもない。行き先が遠い外国で、長期間であればなおさらだろう。

二人の著者は旅立ち前、旅の途次、そして旅を終えるまで、現実的で合理的な、また情緒的な、双方の経験をしたはずだ。その処理のしかたが、年齢ではなく、人によって異なるのだろうか。

人は、自信を持って現実に即応し、合理的に行動でき

る人と、現実に対してもすぐに反応せず、情緒的に処理をしてから行動することの多い人とに大別されるのではないか。

二冊の旅日記を対比し、記された内容からあふれ出ている思想や、情緒的表現に置き換えられた経験について考えながら、自身を振り返った。

\*

最近、「右でも左でもなく、前に進むために」ということばと「イデオロギーではなくコスモロジーで」ということばを知って、時おり思い起こしている。論理の方に近そうな表現だが情緒的に心に留めた。

「思想もいいが、とにかく前へ」「集団内で円滑に伝わることばもいいが、誰にも伝わることばで」ということだろう。

石森延男氏なら二つのことばを、なつかしい物語にされたらと思う。そんな物語も読んでみたかった。

(にゃんぼうかく・しゅじん)

# 焼きそば探偵と私

麻野 嘉史

(ヴィイ調査員)

焼きそば探偵と知り合ったのは、十年ほど前のことになる。

まだ私が鳥取でない場所にいたころ、あるまよアニメーション作品にはまっていた。お世辞にもうまいとはいえないが味がある絵、父の死をめぐる活劇めいたストーリー、仏教哲学やオカルト、純文学から魔法少女まで学術的にちりばめられたネタの数々—— 独特な作風から熱狂的なファンを生み出したその作品の、私も彼もファンであった。ただ、その作品については措く。今回の主役は焼きそば探偵である。

「焼きそば探偵」と言っても、別に焼きそば殺人事件を解決したり焼きそば不倫を暴くため焼きそば尾行をしたりしているわけではない…… 似たようなことはしているが。彼は焼きそばを愛し、焼きそばに詳しく、焼きそばを追い求めている。だから、私が彼を勝手にそう呼んでいるだけである。「焼きそばおじさん」だったり「ミ

スター焼きそば」だったり「焼きそばの精」だったり、私の気まぐれによって呼び名は色々変わる。

焼きそば探偵は貫禄のある体格と剃りあげた頭と柔和な笑顔を持つ男性である。探偵のご多分に漏れず様々なことに詳しい。47都道府県をめぐる千食以上の焼きそばを食べ、それをブログに公開している。こう書くとななる焼きそば食べ歩きおじさんのように見えるが、彼の焼きそば探偵たる所以は食べた量だけではない。

「なぜ関西では焼きそばをおかずにご飯を食べ、関東では食べない傾向にあるのか」

「大正時代の焼きそばの姿」

「海外における焼きそばとその伝播経路」

といった様々な焼きそばにまつわる謎を、該博な知識と論理的思考により見事に解き明かしていくところにあるのである。彼の探偵らしい姿は、たとえば以下の通りである。

彼を含めた数人で食事をしていた際に、中の一人(仮にA氏とする)が「自分の母親の作る焼きそばが不味かった」と漏らしたことがあった。焼きそば探偵はそれを聞き、A氏の出身地が岡山県であることを確認すると、「不味いというのは水分が多くベチャベチャだった、ということじゃないですか？」と問う。なぜ分かるのか、と驚くA氏に、焼きそば探偵は「家庭用焼きそばの王道とも

いえる（マルちゃん焼そば 3人前）は今でこそ全国区だが、A氏が子供だった時代には中国地方などには入っていなかった。その代わりに定番だった某社の焼きそばは水分含有量が多いため、炒め方が足りないといべチャベチャになってしまふことが多かった。そこから推測したのだ」とこともなげに答える。まさに焼きそば探偵の面目躍如、といった瞬間であった。

焼きそば探偵に、なぜ焼きそばを追い求めるのかを聞いたことがあった。焼きそばへの熱い思いを聞きたいがゆえの質問であったが、彼は「もちろん焼きそばは好きだけど」と前置きをした上で、焼きそばを嫌いな人は少なく、皆がそれなりに好んで食べる料理でありながら、食べ歩きや研究のジャンルとしてはラーメンやカレーに比べてマイナーであることを挙げた。「人のやらない分野で3年やり続ければ日本一になれる」から、焼きそばに特化して活動しているのだ、という。確かに知り合ってから数年で彼は焼きそばの専門家としてテレビやラジオに出るようになった。自分も「ウクライナ・ロシアの創作妖怪」などという、興味を持つ人のあまり多くない分野を調べているため、彼の言葉とその結果は励みになった。

これまで何の気なしに食べていた焼きそばの向こう側に大きな広がりがあることを焼きそば探偵のおかげで知

ることができた。彼は今日もどこかで焼きそばを食べ、焼きそばを広めているのだろう。



（広告）

ウクライナ出身のロシア文豪ゴゴリの怪奇小説「ヴィイ」。映画にもなったこの作品の表題は一匹の妖怪の名であるが、この妖怪ヴィイの正体は未だ謎に包まれている。ウクライナの民間伝承や文学的観点などからヴィイの正体を追い、また日本での伝播を跡付けた『新版 ヴィイ調査ノート』好評発売中。お買い求めは定有堂にて。

## 見えない

スザワ マリコ

(考古系もの書き)

いつの間にか鳥取る県から星取る県になった本県は、確かに星がよく見える。自然の光がよく見えるのは、人の光が少ないということだ。百年くらい前までは、日が沈めばそこら中が暗闇だった。家の中でさえ、光が照らしきらない場所は闇で満ちていた。

暗闇を恐れるのは、ヒトの本能だろう。視界が悪いことは危険で、獣などに襲われる可能性もある。何より「見えない」「得体のしれないもの」が近くにいるかもしれない、あるいは「見えてはいけないもの」が見えてしまいかもしれない、という感覚が誰しにもあったはずだ。真夜中の山中で、あるいは明かりのない厠の中で、ヒトは日常的に暗闇と向き合い、恐れを感じていたに違いない。

い。それを推量でしか語れないのは、現代に生きている私からは少し遠い感覚になりつつあるからだ。

そんな私にも、暗闇に対する鮮明な思い出がある。

以前の職場は山の中で、周りには民家がなく、夜になると一寸先も闇だった。ある日、一人で仕事を終え、帰宅しようと思ひ警備をかけ部屋の電気を切った途端、視界が皆無になった。

それは出口の外灯をつけ忘れたという単純ミスで、警備を解除して明かりをつけ直せばよかっただけだ。ところが鳴り響く警報音と無い視界に軽いパニックに陥った私は、早く外に出ることしか考えられなくなり、暗闇の中を出口に向かって歩み出してしまった。

足下は当然見えない。出口までの道のりには障害物もある。心臓が高鳴って冷汗が出た。手探り足探り、壁伝いに移動し、なんとか外に出て外灯のスイッチを押した。瞬間、世界に光が戻ってきた。

何故聖書の冒頭で神が光あれ、と言ったのか、納得がいった。暗闇がこんなに恐ろしいものだと、光がこんなにも有り難いものだとは知らなかった。

暗闇の中では、自分とその他の境界が分からなくなつた。光が戻って、闇から切り離された自分の輪郭が見えて、ひどく安心した。

一方、暗闇の中で、戸惑い焦り考え動いた私も、輪郭などなくとも、確実にそこに存在していた。

大学生になってから、妖怪や仏像・曼荼羅といったものにはいたく興味を持った。元々好きだったわけではなく、むしろ怖くて苦手だったはずだ。文芸部で勧められた京極夏彦が面白かったことが深みにはまった原因だと思っていた。

けれど最近になって、何故それらに興味を持ったのか、理由が分かるようになった。私は、ヒトが「見えないもの」に姿を与える能力に惹かれているのだ。

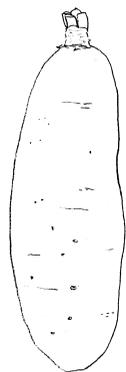
仏像や仏画は、それまで日本になかった「神」「仏」に「姿」を与えた。仏教美術の先生曰く、経典から仏の世界を具体的に想像して展開していくのが優れた宗教者であるという。それを具体化したものが仏像や仏画なのだ。仏像は、この世に存在する物体であって「物」ではない。優れた彫刻や絵画でありながら、単なる「物」ではないと思わせる力は、造形のもつ力そのものだ。

妖怪の様な恐ろしいものは、(世の中の妖怪好きには自明のことだが)現象であって存在ではなかった。その「得体のしれないもの」に具体的な姿や名を付けたのが数々の妖怪絵巻であり江戸時代の妖怪画だ。ゲゲゲの鬼

太郎に登場する有名な妖怪も、水木しげるが柳田國男の『妖怪談義』に掲載された現象に絵をつけたものが多い。

神仏も妖怪も、姿を、名前をつけることでヒトは「見えないもの」から「見えるもの」を創ることに成功した。洞窟の壁や土器に顔料や鋭い線を引いていた時代から、木を彫り紙と筆を得てその力はどんどん発達していった。美しく安らぐものだけでなく、恐ろしいもの、怖いものと分かつてもつい見てしまうのは、それが魅惑的だからに違いない。

けれど、見えないものに姿を与え続けても、只の暗闇だけは、いつまでも暗闇のままだろう。私はそれを嬉しく思う。ヒトには暗闇が必要なのだ。見えないものからみえるものに気づくためには。



Daikon 辛味大根

## 聞いて・見て・感じて・書く ヤポネシア ⑤

芝野 浩貴

(地球探検家)

松本健一の唱える砂の文明、石の文明、泥の文明は、それぞれイスラム圏、ヨーロッパ、南東アジアのことである。気候(Clima)の語源は傾きである。場所によって太陽の傾きが変わるから、それに伴い衣食住のスタイルが変わってくる。和辻哲郎は早くから、世界を気候で区切り、モンsoon型、砂漠型、牧場型に分類してるが、「風土」という言葉には、人間の存在が絡み、歴史的文化的背景も加わる。単なる自然現象でなく、人間が自己を見出す対象で、文芸、美術、宗教、風習など人間生活の表現の場であるという。柳田国男や折口信夫は沖縄からフィールドワークを始めた。自分の中に毒を持って、と言った岡本太郎も、戦後いち早く沖縄久高島の風葬を中心に沖縄文化論を展開していた。全学連書記長で精神科医だった島成郎は沖縄の病院で亡くなった。何故、沖縄だったのか？

珊瑚学・風水学・地理学など20代からフィールドワークを通して、多くの分野に精通していかれた目崎茂和氏と同じ船に乗船した機会を捉えて、いろいろ尋ねてみた。

(以下の文で、インタビューは2015年冬の船の中、現地を回ったのは2017年夏である)

### 「マングローブ・水」

琉球大学が初任勤務地であったことから、川に注目されたらしい。日本内地の川の出口には砂があるが、砂は岩が削れるのでなく、岩に浸みた水が凍って膨張する時に割れて出来ると。だから、岩が凍らない沖縄には砂ができない。沼となる。沼にはマングローブができる。マングローブは生態系の要である。沖縄中部の億首川下流汽水域に行ってみた。4種類のマングローブ、オヒルギ(赤い花)、メヒルギ(白い花)、ヤエヤマヒルギ(緑の花)、ヒルギモドキ(白くて小さい花)が全て観れるのはここだけ。汽水域に棲み、塩を吸い込み吐き出す。そこで有機的な枯葉を川に落とし、それを食べたプランクトンをエビやカニが食べて小魚、大魚、鳥と捕食者が変わる。潮位が高すぎると対流がおこらずに、上部に淡水が留まり、枯れてしまうので、温暖化による水位で消滅の可能性を持つ。オキナワハクセンシオマネキ、ミナミトビハゼなどの固有種が干潮時に食事していた。目崎氏は言う。沖縄は川が少ないし短い(川というヒージャという湧水から引いた井戸を指していた)ので、山に保水力がなく苦労していて、ダム建設が盛んであった。北部五ダムでは導水

管でダム同士を繋いでいる。北部は山原(ヤンバル)と呼ばれる高島、中南部は台地の低島で北部から中南部へ水を配給している。金武(キム)ダムを見学して、水について学んだ。そもそも、沖縄は台風が多く雨水には事欠かないと思っていたので、昨年の夏にしても、今年の夏にしても断水の危機が今でもあることに驚いたとともに、エジプトとスーダン、マレーシアとシンガポールのような水に関しての南北格差が人口減の北部と人口増の中南部にあることも確認した。

### 「建築・風水」

自然環境は建物とも関係がある。沖縄の建物三要素は赤瓦屋根とヒンプン(語源は堀風門)と雨はじ。防水、防水、防雨、日除けなどの機能を持つ。石積みも内地の城よりも早かった。野面積み、あいかた積み、布積みは、それぞれ円、多角形、長方形を組み、書道という真書、行書、草書に相当。識名園の入り口はこの3種をうまく調和させ造園してある。南米ペルーのクスコと同じだ。目崎氏は風水に言及し、北は山、東は川、南は平地、西は道になるように家の向きを配置すると。首里城から中城城、勝連城は一直線にある。首里から琉球大学を越えて沖縄の代表建築中村家に寄った時に北は私的空間、南は公的空間となっていることを確認。客間は南東、フル(豚小

屋、トイレ)は北西。

沖縄はコンクリートの先進国。東京オリンピックや復興支援、黒部ダム建設などに沖縄県民が関わっている。十年前に比べ、コンクリートから木材に変わりつつある。安くて早い正確なAI木材がどんどん台頭しているから。コンクリートは熱をためやすく、夜放熱する。昼は湿気で腐る。柱は石灰岩を土台にする。

### 「イノー・御嶽」

観光客には美ら海水族館と斎場御嶽が人気だが、目崎氏は言う。美ら海でも見られる珊瑚礁と高い陸地の間はイノーといい、海の神へ繋がる場所であり、御嶽(ウタキ)は神が降臨するところで、辺野古マナル岩(頭)、斎場御嶽(腹)、久高島(尾)と一体と成しているから沖縄三大霊所

と呼ばれている。辺野古大浦湾では、国からの補助で警備している住民と基地反対の県民が向き合っているが、環境・生活の問題の他に神の領域にも立ち入ることになる。

地球は水があるから美しい。そして、塩がなくては生きられぬ。水の民営化? 人間さんよ、ふざけるのもいい加減にしなさい!

# 黄金の時よ、珠玉の日よ

本を巡るフラグメント 四

△フカミ ヒロミ  
▽ライオン・ブックマン

昭和五十二年に出版界未曾有の大事件があった。『日本書籍総目録』が刊行されたのである。

この日本版ブックス・イン・プリントがどれほど画期的なものであったか、今時の人には分かるまい。国内で流通している(手に入る)本が「全て」載っているのである。総ページ数二千八百ページ、総掲載点数十八万七千点。

干天の慈雨のように、誠に有難いものであったが、やはり弱点はあった。先ず、高額で個人には容易に手が出せなかったこと(二分冊で二万三千円)。そして、『出版年鑑』同様、件名索引がなかったことである。英米仏独、何れの国の総目録も必ず、書名編、著者名編、件名編の三分冊になっているのが普通である。であるから、本の題名か作者の名前かが分からない限り、検索ができ

ないというのは不便なことであった。ただ、巻末に、不完全ながらシリーズ索引が付いていたのがせめてもの救いであった。全集や叢書は、ある程度これで調べることができた。

この総目録の登場で、探書の能率が格段に向上したの  
は言うまでもない。これが高校の図書室に入ったから堪  
らない。日参してページを繰り、メモに明け暮れたもの  
だ。

余談ながら、流石の総目録も、時流には抗えず、二〇  
〇一年版を以て冊子体の刊行を終えた。この時点で、四  
分冊約一万七千ページ、掲載点数は五十九万点に膨れ上  
がっていた。その後は電子版として「出版年鑑」の付録  
扱いになっている。

もうひとつの収穫は、ゾッキ市(本のバーゲンセール)  
の存在を知ったことである。後で聞けば、友人などは、  
中学時代から利用していたらしいが、新聞広告など見も  
しないし、駅前の百貨店など殆ど出かけない身には、つ  
いぞ知る機会がなかったのである。

これも、図書室で担当教諭から教わった。たぶん、こ  
んな本を見つけたよ、という何時もの見せびらかしがきつ  
かけだったと記憶する。司書室に集まる者が、互いに直

近の収穫物を自慢し合うという床しくも微笑ましい美風があつたのである。

その日の帰りには早速出かけていた。催事場一杯に並んだ本は、豪華本やセット本、歴史書、実用書など縁のないものが多かったが、そんな中に、薔薇十字社、出帆社、桃源社、思潮社、後には幻影城、牧神社などの本が、少なからず混じっていた。

格安とは言え、高校生の小遣いでは何冊も買えるものではない。確か出帆社の『愉しみと日々』と思潮社の『幻影の城』の二冊を買った。前者はブルーストの処女短編集。『失われた時を求めて』が読めない（当時、入手できるとしたのは新潮社の豪華版しかなかった）渴きを癒そうとしたのだと思う。後者はネルヴアル論である。箱入りペーパーバック本という珍しい形態に惹かれた。

その後も毎年出かけ、『アップルパイの午後』やら『孤独な色事師』やら「幻影城」のバックナンバーやらを仕入れたが、段々に規模が縮小され、並ぶ本も安っぽい実用書や児童書ばかりになり、遂には開かれなくなつてしまった。

今でも、時折、ショッピングモールの片隅で「特価本市」とか「自由価格本市」とか称してやっているのを見るけれど、そもそも客層が違い過ぎるので文芸書など望むべくもない。（現在、某TJ堂書店の一角で密かに開

催中でありますぞ）

古書店回りは始めていたが、市内にはN堂とO書店の二軒しかなく、あとは貸本屋が在庫を切り売りしている程度。県内に市（いち）はなく、O書店は立場回りをしていた気配はあつたものの、仕入れも持ち込み客次第となれば荷動きがそうそうある訳もなく、数か月に一度顔を出す程度であつた。

ただ一度だけ、N堂に珍しい一口が入つたことがあつて、澁澤龍彦の著書や幻想文学の翻訳書が一〇冊くらい、帳場の後ろに積まれていた。『ひとさらい』『貝殻と頭蓋骨』『毒菓の手帖』『怪奇幻想の文学』などで、今から考えればいぶん安かつたのだが、それさえも値切りながら一冊一冊買い揃えて行つた。幸い、競合する客がなく、いつまでも売れ残っていたのである。これらは、今日の我がコレクションの基礎になつている。

O書店では、「幻想と怪奇」や「血と薔薇」の端本、山田徳兵衛の『日本人形史』などを買つた覚えがある。

この二軒も、主が亡くなり、店もなくなつて久しい。金もなく、手に入る本も限られていたが、それでもあの頃は、わが黄金時代だったのかも知れないなあ、と思うのである。

# 8月の日記

坪井日記 ⑧

齊藤仁昭

(長崎書店)

8月某日

お盆に親戚一同で集まる。小学生や幼稚園児の甥っ子や姪っ子、いとこの子どもたちが勢ぞろいしていたが、せっかく叔父や我々が庭で肉を焼いたりして振る舞っているにも関わらず、さつさと食事を済ませてゲームに夢中になっている。ゆつくり食事をしましょうぜ?と思うがいつの時代も子どもはみなこんなものか。

出先などで親の携帯電話を借りてゲームをしている子を多く見かける気がする。自分の子もそうなるのだろうか。ちよつといやだなあと思う自分を、おじさんになつたなあと思う。

8月某日

東高円寺でケバブジョンソンの練習のあとに、「北浦

和EDM」というふざけた名前の真剣なパーティーでレコードを流すために北浦和へ向かった。会場の名は「北浦和ちどり」と言い、名の通り千鳥君という友人が運営している飲み屋というかバーというか溜まり場というか。溜まり場なんていう言葉はいつも通用するのかしら。以前はクークーボードという名で別の友人がやっていて、彼が家業を継いで店を閉めることになった際に常連だった千鳥君がサラリーマンを辞めて引き継いだお店だ。クークーボードの時代からケバブジョンソンをフオローしてもらい大変お世話になっている。北浦和EDMはこれまた常連であるオオクマ氏の企画するイベントで、EDMはエレクトリックダンスミュージックではなく、枝豆の略であり、パーティーでは枝豆が食べ放題だ。音楽が好きな常連たちが交互に選曲やライブを行うスタイル。ノリは内輪かも知れないが、かかる曲は素晴らしい。例によって大量にビールを飲んでしまう。終電で寝てしまい、タクシー利用で無駄遣い。後悔。

8月某日

EDM明けでまたケバブジョンソンの練習を6時間。今回は月末の岡山と神戸と、9月の熊本でのライブ用の練習。熊本は持ち時間が長いため、都合30曲くらい練習しておいた。新曲も2曲仕上がった。年々腰にダメージ

がくる。結局いまだ何のトレーニングもしておらず椅子から立つたびにイテテと声が出る始末。練習後にメンバーと軽く食事に行く。ポーカルの杉浦君は先日ソロでワンマンライブをしたらしいがお客さんがワンマンだったらしい。次のライブをがんばろう…！

8月某日

東京に練習やライブに行った後はメンバーの佐藤君の家に泊まり、始発で出て朝7時過ぎの飛行機で熊本に戻りそのまま遅番に出勤するのが常だ。しかしこの日空港に着いたらいつもの便が機材練りのため欠航となっていた。11時の便に振り替えてもらうしか手段がなく、5時間半も仕事に遅刻してしまった。遅刻するととてもヘコむ。散々遊んだ後に遅刻すると特にヘコむ。だらしなく遊んじやうのはいけないと真面目ぶっているだけなのか。以前、神戸でのライブの後に泥酔して寝てしまい、気が付いたら職場にいないといけない時間だったことがある。職場に着いた時の気恥ずかしさ。思い出すだけでヘコむ。しかし楽しむことを制限するのはいやだという我儘。やっぱだらしないのかな。

\*

ガレスピーな気分持ち出してダンス  
魔法で動くだけ

ふさいでる友だちのうちでもダンス  
魔法で揺れるだけ

そして眠るだけ ただ眠るだけ

ウイスキーをかついだ兵隊さん俺には構うなよ

少なめに見込んだ人生があふれ出すのを黙って見なよ

僕はかきませ壊す人

わめいて隠れる人

叩いて壊れるその瞬間も

布団をかぶせるだけ

そして眠るだけ ただ眠るだけ

想像は煙を吐き出して悲鳴をあげるようだ

少なめに見込んだ人生があふれ出すのを黙って見なよ

僕はただ寝るだけ

ただ眠るだけ

(ケバブジョンソン「ガレスピー気分」作詞…杉浦真寛)

## 今の若者が文章を綴れないのは

うしきのどか

(鳥取環境大学環境学部)

親に指摘されたことだが、私と同年代の多くの人たちは「文章」を書くのがとても苦手らしい。その背景には、考えを文字起こしする機会がライン(チャット)やツイッター(文字数制限のあるブログ)などが多くを占めるからだからだと思う。この考えはあながち間違いではないらしく、同じ考えの記事を見た覚えがある。さて、そのままですてて文書を書くのが苦手なことだと指摘される必要があるのか。

社会人になり書類やメールを出す際に、宿題のレポートを出す時など必要な場面はいくつも出てくる。だから文章力が必要である。ではなく、ここではこの文章のように話題について一区切りつけずに「文章」を書くのと、チャットのように「文」を並べていく違いについて考えたい。

文章と文の違いを分かりやすく区別するため、親に言われた「ラインの時とメールの時じや意思疎通のしやす

さが違う」というのを元に考えみる。すぐ気づく違いは、すぐに返事が来るか否か。もちろん相手と時間が重なっていることが前提であるが。チャット(ライン)ではロスタイムがほぼない。喋るのと同じで考えを直接出す。私の知る限りラインはただ日常会話をだらだらと喋るのと変わりない。一方、メールはチャットと同じようにボタン一つでメッセージが送れるがロスタイムがチャットと比べ長い。そして一度に送る文章量も大抵は多くなる。どちらも同じ情報量を伝えることを前提にすると、これらの違いは文章を推敲する機会を左右しているはずだ。

と、言うより同年代から推敲という言葉が出てくることが想像出来ない。それくらい普段から推敲するほどの文章を書かないし書いてもどう推敲していいのかわからないと感じているはずだ。一緒にレポートを作っているも、文の単純な間違えや言い方などの見直しの域を超えていない気がする。私の思う推敲とは見直しに加えて、このレポートで伝えたいことを表現できているか、裏付け出来るものは書かれているか、事実と予想・心情を混同していないか、趣旨に合った文章構成か。書き連ねていけばキリがない。そんなことに気を配り書き直すことだと思っている。

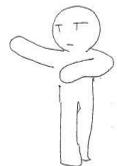
全ては自分が他人に伝えたいことを文章で理解してもらうために。私の体験した学校生活の中ではそんなことを意識して書く機会が少ない。そしてラインなどを使う

ことで推敲せずに文を書くことに慣れたため、同じ要領でただ、文を重ねて書いているため文章がわかりづらくになるのだろう。

今までだって似たようなことは言われ続けてきた。ただ、今までと違うのは文を書く機会はずぶん増えているのに、文章全体を統括してみるとという経験が一部分を見るというのに飲み込まれてしまっているということだと思ふ。

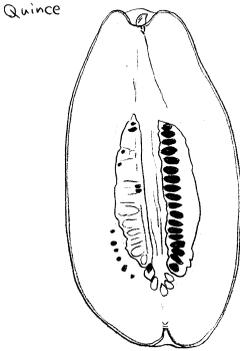
言葉を使うのは結局他人に意思を伝えることだ。一部を使いこなせても、全体をマネジメントしなければ、効果は弱まってしまふ。言葉を適切に使えないと意思疎通が難しくなっていく。今、僅かながらもズレが出ている。それは今までの世代間のズレと同じにしていいのだろうか。

## 酔芙蓉



五百川 知子

アシル



稽古終へ解るる家路酔芙蓉

しばらくは厨に座る南瓜かな

子ら見入る終戦の日の紙芝居

闇雲に音を重ねて花火果つ

一粒の希望を持てり稲の花

## 神戸外国人墓地



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

公開の日が設けられているので、申し込めば入ることができる。私たちは共通の知人の墓参のために行くので、まずは管理事務所に墓参願を送り、承諾書もらってから希望日にお墓参りができる。墓参願には、私たち二人の被埋葬者との関係を記入する欄がある。満州国立大学ハルピン学院の卒業生として師弟関係にあり、恩師が亡くなった後も夫人を支えてこられてきた方と、夫人の晩年に親しくさせていただいた私の名前を書く。

この方とは二年前に墓参して以来、すっかりご無沙汰してしまっていたが、誤嚥性肺炎を患って二か月間入院されていたことを知り、自宅に戻られて落ちて着かれた先日、訪ねて行った。医師もびっくりされたほどの回復力、とても九五歳とは思えないと。シベリア抑留から帰ってこられた人に備わっている生命力とでもいっべきか……

港町神戸は開港以来、多くの外国人のおかげで発展してきたといえる。ロシア系の名字「ゴンチャロフ」「モロゾフ」は、チョコレート菓子で有名なブランドである。学生の頃、モロゾフ氏のチョコレート工場を見学させてもらったことがある。心の広いやさしい人だとの印象を持ったのは、決して出来たてのチョコレートを次々といいただいたからではない。そのモロゾフさんもこの外国人墓地に眠っていらっしやる。

ここ十年ほど、七月の祥月命日前後に外国人墓地へご一緒させていただいている人がいる。外国人墓地は六甲山の自然を感じられる静かなところにあり、近年は一般

お互いに共通の話題は、昨年も今年も外国人墓地に行けなかったことが心苦しいということ、そして仲良く眠っておられるご夫妻についての思い出話。このご夫妻、ご主人はハルピン学院でロシア語教師をされていたが、学生の頃、会話力上達のために、当時はロシア人家庭を訪問することがよく行われていたようで、偶然に受け入れてもらった家庭のお嬢さんと恋に落ちて結婚された。日

本の習慣や文化を強要することなく、一生かけて守り抜くこと、両親に誓って許しを得、亡くなるまで実行された。日本のご両親や親戚との関係を失つても、一人の女性への愛情を貫かれた。戦後、日本での生活が始まってからも奥様を優先に、日本人社会とは距離を置いて暮らしていらしたと思う。

私が奥様と知り合ったのも不思議な縁であった。長期滞在していたウラジオストクから帰国して仕事もなく暇にしていた頃、北海道から遊びに来た知人に誘われて、神戸にロシア人でご主人を亡くされ寂しくされているご婦人がいるので、一緒に訪ねようということになった。その後も私は月に二度ほどお邪魔するようになった。ご機嫌伺いだけの時もあるし、ゆっくりお話を聞くこともあった。

毎回、ご主人のことを思い出して、ロマンチックな馴れ初めから、どれほど自分を大切にしてくれて幸せであったかという話から始まるが、次第に終戦の混乱期にソ連兵からどれほどひどい目にあわされ、苦しめられたか、憎しみの感情が露になってくる。自分の父はウクライナ人、母はフランスとドイツのハーフ、家庭ではドイツ語を話していたが、ハルピンの女学校でロシア語の教育を

受けたのでロシア語を話すことになった。「私の体の中には、あの忌まわしいロシア人の血は一滴も入っていない」とロシア語で自分の感情をぶつけられる。彼女にとつてロシア語は憎い敵の話す言葉だ。ある時、ロシア人と一緒に訪ねた後に、ロシア語で話せるロシア人以外の話し相手が欲しかったことを改めて知った。

突然の計報の知らせを受けたのは北海道で、先に神戸で私を紹介してくれた知人と一緒にいた時であった。私はちようど仕事を終えて神戸に戻る日、彼女もまた、翌日には神戸のハリストス正教会で行われる埋葬式に間に合った。願っていらしたように、お一人で静かに愛するご主人のそばへと、お気に入りのピンクのワンピースを着て旅立っていかれた。一年ちよつとしかお付き合いはなかったが、墓参のたびにお二人の幸せな様子に触れることができる。

「ぜひ、また一緒に」という希望を持って、現在リハビリに励んでいらつしやると、ご家族の方から聞いた。墓参後にはいつものように鰻を食べに行きましょう。お互いに一年に一度の楽しみでありながら、ここ二年間は食べていないですものね。

# 鳥取あれこれ その二十五

内田克彦

(地域研究家)

『「三愛のクニへ」(外交官兄弟澤田節蔵・廉三と美喜)研究会』に参加し、各人物の事績を調べている。節蔵は『澤田節蔵回想録』を、美喜も自伝を書いており、美喜の場合はさらに研究本も出版されているため、それらを辿ればよい。しかしながら、廉三は一九五〇年に『凱旋門廣場』をまとめたのみで、岩美町の関係者が遺稿刊行会を作って一九九〇年に発刊した『随感随筆』や、資料集として鳥取県立公文書館が二〇一〇年に発刊した『澤田廉三と美喜の時代』があるものの、廉三の事績がすべて判るわけではない。不明な時期を調べるためにはネット検索で研究書・論文等を拾い出す必要がある。

先日、東京国立近代美術館所蔵の小磯良平「日緬条約調印図」がヒットした。小磯は一九四三年八月、廉三がビルマ大使として、ビルマ側代表バー・モウと調印している場面を描いていた。小磯が生前、戦時下に描いた戦争画の公開に消極的だったためだろうか、こんな絵があることはこれまで知らなかった。この直ぐ後の八月一〇

日付けの全国紙に掲載された、小磯が描いた特攻隊員の肖像画が見つかったとの記事を注目して読んだ。

因みに、この調印の意味を、恵崎麻美著「小磯良平・室内での創作―エドガー・ドガ受容から戦争画面制作までを中心に―」では次のように記述している。

これはバー・モウ博士を新国家代表として選出するとともに、日本とビルマが同盟条約と軍事秘密協定に調印することによって、ビルマが英米に対して宣戦を布告するものであった。

廉三は、一九四〇年一二月、いわゆる松岡旋風により仏国特命全権大使の任を解かれ浪々の身となったが、年譜によると、「一九四三年五月、外務省囑託。七月、特命全権大使、ビルマ。」となっている。『随感随筆』から引用する。

大使任命に当たり時の外務大臣重光葵氏は、瘡痍患疾の地に行くのだから家族ともよく相談して返事をしてよろしいとのことでしたが、私は政府の命ずる所どこへでも行くといつて即座に赴任方承諾したのでした。

廉三は、ビルマ赴任後俳句を作り始めており、その詞

書(とはがき)に、「チャンドラボーズ氏の自由インド軍を率いてビルマに進駐、インパールに向かわんとす」、「河辺軍司令招宴」とあるように、のちの「インパール作戦」に関連した人物との邂逅もある。戦後、バー・モウが日本に逃れてきたとき、廉三との接触があったのだろうか。

一年余りの任期を終え、重光外相のもと一九四四年一月再び外務次官に就く。同年七月に東条英機内閣が倒れ、小磯國昭内閣に変わっていた。松村謙三の日記を読み解いた武田知己大東文化大教授の、ある研究会でのコメントがネット上にある。

私が非常に面白かったのは、(昭和19年) 12月20日の「対ソ外交について」というところだ。松村はどうやら対ソ外交については、重光に対してやや批判的などころがあったようで(略)「澤田外務次官の招宴に赴く、翼政会幹部あり。食後、澤田氏より外交に関する詳細な報告あり。そのうち対ソ外交については、小問題を逐次片づけるがごときよりも、大局に基づき手を打つ方法もありというふうには大臣にも進言せる旨語れり。(略)次官の意見が行われれば対ソ政策の一転換あるべし。」と(略)述べており(略)

この時期、外務省は、独ソ間を日本の斡旋によって講和させ、ソ連を米英から切り離そうと試みていた。ところが、一九四五年四月五日、小磯内閣退陣の日、モロトフ外相は佐藤尚武駐ソ大使に対し、日ソ中立条約の不延長(但し一年後までは有効)を通告したのであった。

四月七日鈴木貫太郎内閣になり、外相も東郷茂徳に変わった後の五月、外務次官を退く。

同年四月、節蔵が鈴木内閣の一〇名からなる内閣顧問に任命される。『回想録』から引用する。

日本がここまで押し込まれた時、ソ連としてはわが国のために奔走する利益がないと云って反対した。(略)ソ連は既にこの年の春その不延長を通告してきており、ソ連は力により実利を追う傾向がある。(略)ヴァチカンに頼むがよい(略)私はヴァチカンが中立の精神王国たること、米国はカトリック国ではないがそのカトリックは有力な存在であることなどを長々と説いた。

(以下、続く)

# 延びて来た手

秦卓梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

シェーンブルン、広大な公園にはグロリエツテのある丘、そこへ続く動物園、ユーゲント様式に設けられた温室の植物園、そして名の由来ともなった余りにさゝやかな（名水を湛へる）「美しい泉（シェーンブルン）」等が。更に上下の丘陵に広がる森の奥には眞夏の間だけオープンする真水のプールがありよく出掛けたものだ。

## I

ひとしきり泳ぎ疲れプールサイドで日光浴を楽しんでゐた僕の目に入った光景。10歳位の少年が・うん？溺れてるのか？…いや時々笑つてるからふざけてるのだからうか？兎に角様子を見に行かなきゃ、さう思い静かに近づひて行つた…あと2mといふところで肩越し、ブロンドの娘の後ろからニュツと延びて来た巨きな手に肩を不意

に掴まれた。

## II

「待て！」「そんな事云つても溺れる？かもしれないひ、済まないが急ぐ！」「そんな事あ無い、戯れてるだけ、そつとしてやんなよ」見ると長い手の主は身の丈2mを悠に越ゆる巨軀。「兎に角こつちへ来いよ」「いや、危ないかもしれない、水も呑んでるやうだし急ぐんだよ」「確かに水も一寸は飲んでる、俺も君より前から気になつてずつと観てるんだが、どうやら楽しく遊泳中らしひ」「え？愉しく？」「兎に角こつち来いってば」

## III

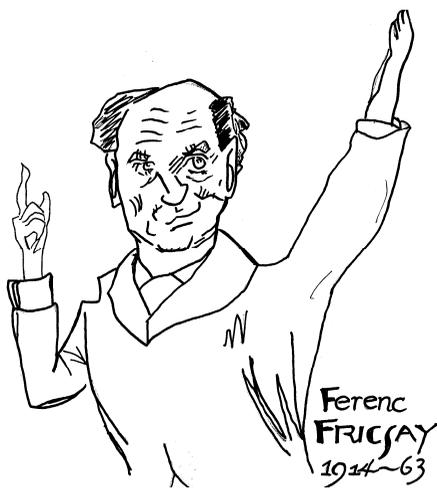
強引な長い手に半ば引き摺られるやうに芝生に腰掛け、この髭面、巨きな手の主と話を続けた。青い水のプールでは手と脚の曲がつた少年があひかはらず半ば潜水に近づひ、背中を思い切り屈伸させた些か奇妙な泳法で泳ぎ続けてゐる。水をかなり飲んで居るのだがあれで全然平気らしひ。其れどころか窮屈な「彼のスタイル」で眞夏のプールをすっかり楽しんでいるやう…「だうだひ其れでも君は無理やり彼をプールサイドに引き擦り上げるつ

もりかね？」巨人は問う。「否、あれが彼の「個性」で、其れを楽しんであるといふのなら？全く何云ふつもりも無い」内心「大陸の人はおおらかだなあ……」さう思った。が直ぐ呑み込んでしまった。「だらう、皆が君のやう、海豚の如く速く泳げる訳でもあるまひ？」 齡19で元競泳選手の自分には全く思ひかけなひ件。巨きな手は「其れが証拠に、此処に居る何十といふ大人達、誰も彼の個性を云々いふ者も居ないんだぜ、皆さん同じ光景を視て、唯静かに見守ってる」「確かに・ぢや万が一援けでも呼ぶ様子でもあれば、即座に駆けつける事にしやう」

#### IV

「では誤解の解けた所で俺の杯を受けて呉れないか？」差し出された小ビール（半1）やリキユールに目を丸くして答へた「いや僕は、東洋の海豚の親戚なんで、その、あそこの少年みたひしこたま飲んで腹膨らませてはこの先泳げなひんだよ」「ハハさうか、違ひない。」かはりに飲み干した炭酸入りのビターレモン、其の小壘がやけに苦く感ぜられた、或る昼下がりの出来事。今年鳥取の酷暑は遠い日の記憶をあこれ引つ張り出して呉れる……。

「今回の一枚」 J シュトラウス II 世 喜歌劇「蝙蝠」  
F・フリッツチャイ指揮 RIAS (ベルリン放送) 室内合唱団  
交響管弦楽団 P・アンダース、R・シュトライヒ他 RIAS  
ベルリン放送 1949



画. A. T

2018. 08. 05

# フレンチ・トースト

あきの素生

(くうねるめがね)



焼くときは、熱したフライパンにバターを溶かし、パンを入れたらフタをする。焼き色が食欲をそそるし、表面がカリッとしているのが好きなので、焼き加減には気をつけているつもりなのだが、結構な割合で焦がしてしまふ。今回も残念ながら、やや香ばしすぎるフレンチ・トーストとなった。

フレンチ・トーストを久々に焼いた。普段あまり牛乳を飲まない。飲みきれずに、いつの間にか期限切れになることが増えたから、だんだん買わなくなった。スーパーでたまたま牛乳が目に残り、卵ある、パンある、明日の朝はフレンチ・トーストにしよう! と思いついたのだ。

分量は適当、いつも微妙に味が違う。塩を入れないときも、逆に入れ過ぎてやたらしょっぱいときも、塩も砂糖も少なすぎて、ほとんど味がしないとときもある。でも、バナラ・エッセンスだけは、きちんと入れる。ほとんどお菓子を作らない私のバナラ・エッセンスは、フレンチ・トーストのために用意したものだ。味はどうでも(どうせメイプルシロップかはちみつをかけるし)、この香りがあるとないのでは、フレンチ・トーストを食べた時の幸福感が違ってくる。

フレンチ・トーストを作るとき、「クレイマー、クレイマー」を思い出す。随分前に観たのでうろ覚えなのだが、ダスティン・ホフマンが、息子のためにフレンチ・トーストを作るシーンは印象に残っている。慌てて、周りをぐちゃぐちゃにしながら作る1回目も、慣れた手つきで、静かに丁寧にする2回目も。たっぷりの卵液に、ざぶざぶパンを浸して、なんて贅沢なんだろう、きつとおいしさに違いない、あんな風に作って食べてみたい、と思ったのだ(もちろん、そんなところだけ観ていたわけではなく、2回目のシーンの、ダスティン・ホフマンの姿勢の正しさに感じたせつない気持ちもちやんと覚えてはいる)。しかし、たっぷり、ざぶざぶの後の卵液はどうしたらいいのか、などと考えてしまうため、未だに実行に移せていない。ちょうどパンがひたひたになるくらいの分量で、つつましく作っている。

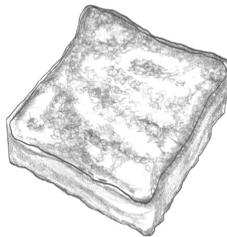
物語の中の食べものは魅力的だ。絵本や漫画に出てくる料理のレシピ本も出版されている。『ぐりとぐら』の大きなカステラは、その代表選手だろうか。

子どもの頃憧れたのは、「3びきのくま」に出てくるスープ。元々は「おかゆ」なのかもしれないが、私の中ではスープだ。絵本で読んだのか、おはなしとして聞いたのか曖昧だけれど、コインポタージュみたいにとろりとしたスープで、あたたかみのある、丸い木の器に入っていて、木のスプーンですくって食べるという絵が浮かぶ。いちばん小さいくまのスープ、というところもいい。大好きな物語だったが、好きだったのは、このスープの存在が大きいのでは、と思っている。

大人になってからだだと、例えば、川上弘美の小説（確か『どこから行っても遠い町』だったと思う）に出てきた、鶏のキンカンの煮付け。それまで調理したことどころか、食べたこともなかった。でも、なぜだか無性に食べたくなってしまい、探してまで買って、甘辛く炊いた。

「かもめ食堂」のコーヒー。家でコーヒーを入れるときは、おまじないを唱えないまでも、粉の真ん中を窪ませてゆっくりお湯を注いでみる。江國香織の短編の、刻んで刻んで刻んだねぎを、たっぷりかけた冷奴。物語の文脈とは関係なく、心惹かれる料理のひとつだ。

食の記憶を辿るのは楽しい。他人の紡いだもの、自分の経験、映像で見たもの、想像の中にしかないもの。何を対象にしたにせよ、そこには「おいしい(おいしいそう!)」と感じた、幸せな記憶がある。



## 伊達文

(人生休憩中／ノージャンルイベント)

その後帰郷することになったとき、私はその友達から本を借りていた。返す日にちを相談したら「いつでもいいよ、帰ってからでも」と言ってくれるのでじゃあそうするかも…と考えるうち、いや、むしろ帰郷してから贈り物と一緒に荷物を作って送ったら友達にとって嬉しいんじゃないかな?と思った。

実際友人は、私からの荷物をとても喜んでくれた。喜びとお礼の長いメッセージには、「友達から小包が届くってこんなに嬉しいことなんだと初めて知ったよ」とある。私はいくつかの例外をのぞき、お土産や誕生日プレゼントを贈ることをしない。代わりに、その人とすごした時間から知りえた「この人はこれを好きだろう!」というものにめぐり合ったとき、何の祝い事でもなくそれをプレゼントする。

私は、彼女にとって誰かから荷物を受けとることがそんなにも嬉しいことだと実感しているわけではない。家族からの荷物を受け取り慣れている私は、もちろん毎回喜んではいけるけれど、彼女ほどにはそれに焦がれたことがないから。感覚を共有しなくても、相手が喜ぶことをすることはできる。

夏はほかに友人の感覚が印象に残ることがあった。東京時代の友人と、その同郷の友人二人と神社を訪れたときのこと。初めましてのかたの一人が、賽銭を入れ、

東京在住の友達が、私が送った荷物をすごく喜んでくれた。何を詰めるか、帰郷してからずっと考えたり探したりして詰めたから、こちらもすごく嬉しい。友達が好きなもの。うちに来た時試したいと言っていたけれど試し忘れて帰ったもの。絵の好きな友達だから、便せんは彼女の好きそうな絵が描かれたものを選んで。

きっかけは、ちょうど友達が遊びに来ていたときに、実家の母から荷物が届いたこと。友達は、それを見てうらやましいと言った。東京生まれ東京育ち、親族も東京住まいの彼女は、そういう体験がないからと。

それを母に話したら「あら住所を聞いておいて。送るわよ」「いや、離れた『家族』からの荷物が欲しいってことじゃないの?」「そうかなあ?」と母。

そして願いごとをしなかった。私はそれを見て、友達になりたいと思った。

従来流通している意味で言えば意味不明で、しかし新しい意味があるとも言える行為。行為と目的から目的が切り離されて宙に浮き、報いは放棄された。あとには行為だけが残り、行為者ではない他者に実りを運んだ。

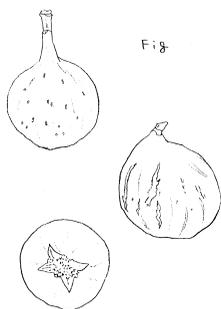
これはおそらく善意とか狙ってやったとかではなく、唐突に無意味に、あつげらかんと行われ、だから私は興味をもった。もちろん、本当のところ彼女がどうしてそうしたのかはわからない。私は彼女の感覚を共有したいのではない。理解したいのでもない。私は、理解しないまま彼女を好きである。

違ったまま一緒にいられるなら、仲良くなれる。違ったままでいられないなら、単に相性が悪い。違ったままでいないなら、互いにとつての新たな道を作れているか、あるいはどちらかがどちらかの文化に服従している可能性がある。

先日、体の治療先で、感覚の過敏さに驚かれた。「まだ標準の強さじゃないんですけどね」、「レベル」でダメですか」。痛みで泣き叫び治療が行えず、別の治療方法も痛すぎて行えない。かつてやはり泣きながら「痛いです」と言ったら「痛くないはずです」と言われたことを思い出す。

そんなとき一番つらいのは、治療が行えないことでも身体的な激痛でもなく、普通の人はこれ痛くないんですけど本当にこの程度で痛いんですか？という、日常でも飽きるほど浴びてきた眼差しである。あなたは我々と感覚を共有しないんですかという問いである。

しかし私の体が痛いかどうかの主権者は私である。私が痛く感じることを私でない人が痛く感じないことを私は否定しない。しかし同じように、私が痛いことを痛くなく感じるという目線を私は拒否する。共有しなくないから、違ったまま対等であるということについて、ずっと考えている。



# Hoarder

古賀 啓二

(米国シガン州 隠棲)

## 1

ドアが開閉する扇柱状の空間だけを残したホワイエの、もう見ることはできないが、開く側の奥の隅に積み上げられている The Honolulu Advertiser の一番下に一九八五年十二月十一日発行版がある筈である。それは、ジュリー・キンケードが脳梗塞で倒れた日で、退院すると、玄関先に散乱していた十日分の新聞をそこに置いたのが始まりであったが、今では家中を侵食している。殆ど読むこともないのに捨てられないのは、もう関り合うことのない外界が現実存在する記録はそこにしかないから。

これらの新聞を捨て去ることは彼女自身の消滅を意味するとジュリーは信じている。

ジュリーは、一八二〇年、アメリカ本土の伝道評議会から派遣されたプロテスタント宣教師アーサー・キンケードから数えると、五世代目の末裔で、キンケード家は、ハワイでは名門のひとつとして知られていた。しかし、聖職を捨て、砂糖精製への投資で巨万の富を成した二代目、三代目の隆盛以降は退嬰の一途で、両親はこのマノアの大邸宅で毎夜のようにパーティーを開き、酔ってない方が珍しく、昼過ぎ二階の寝室から、二日酔いでむくんだ顔で降りて来る際には既にグラスを携えていた。

兄のサミーはシニア・プロムの翌朝、タキシードを着たままプールで溺死しているのを、これも酔いつぶれ、朝帰りしようとした女友達により見つけられた。母親の飲酒は更に量を増し、昼間階下に降りて来ることは殆どなくなつた。ジュリーが高校のジュニアであつた年のクリスマス・イブ、深夜泥酔して帰宅した父親が、尋常ではない大酩をかき、揺すっても起きない妻に怯え、救急車を呼んだものの、母到着を待たず、落命した。アルコールと少くない量の睡眠薬の併用は、常用していた、という事実がなければ、自死との区別が難しかった。初老性痴呆と鬱の初期兆候が顕れ始めていた父親は、このショックでいつきに症状が進行し、施設への入所を余儀

無くされた。

身寄りの無くなったジュリーを引き取るうとしてくれた叔父夫婦もいたが、一月には「成人(十八)」になり、法廷代理人なしで遺産相続が可能になるジュリーは、勝手気儘な生活ができるマノアの家に独りで住み続けることを選択した(通いのメイドはふたりいた)。

高校を卒業すると、他の裕福な家庭の友人達はそうするのが通例だから、という理由のみで本土の大学に進んだが、飲酒とコカインで、一単位も取得することなく、二学期の途中でハワイに戻り、リハビリへの入退を繰り返し、それが三十三歳での脳梗塞まで続いた。

## 2

私は、ホノルル市立病院の救急医で、三十過ぎだが、救急医としてのレジデンシー(研修期間)を了えたばかりの新米だし、週末のセカンド・シフトを割り当てられることが多いのは仕方ない。独りなので、そう苦にもしていなかった。乾季に入った五月としては珍しく、終日雨がしのつくメモリアル・デイ・ウィークエンドの金曜日、午後四時四十五分の二直の交替時間に病院に着くと、ほぼ同時に、間もなく腹部の激痛を訴える急患が私の担当として ER に到着すると、コーディネーターから携帯

へテキスト・メッセージが入り、間を置かず電話でも連絡が入る。救急医への転身以前は消化器系外科医であったので、この手の患者がアサインされるケースが多い。スクラブ(手術着)に着替え、待機していたが、当初の二十分以内という到着予測時刻を大幅に過ぎても患者は搬送されず、コーディネーターに連絡すると、救急隊員が、患者の Compulsive hoarding (脅迫的蒐集障害)により、保護できないという。意味がわからず、問い返すと、山積された新聞紙により、通路が狭窄され、救急隊員が進入不可とのこと。担当隊員が誰かと問うと、ステイビー・キム。Eのスタッフの彼に対する仇名はプーヨー。熊のプーさんのようにぼちちよりしているが、プーヨーの悲観性を兼ね備えており、現場からの患者の状況報告も実態より重篤に報告される場合が多い為、プーとプーヨーを併せて「プーヨー」。

私もプーヨーも韓国系で、研修期間に知り合い、お互い高校で選手であったこともわかり、テニス友達となつたのだが、プーヨーは体型に似合わず敏捷で、自分の仕事に関する陰惨で暗澹たるユーモアを気に入っていた。お腹を頑張つて引つ込め、新聞紙の山に分け入ろうとするプーヨーを想像し、嘔き出しかけているところに、再びコーディネーターから連絡があり、携帯による患者との連絡が途絶えたとのこと。私が担当医であることを

知った救急隊員（プーヨー）があの子を呼べ、と繰り返して要求しており、しかもこの時間、市内からマノアまでの道は混むので、救急ヘリで来いと云っているが、対応は可能か。極めて例外的な処置であることは理解しているが、状況も極めて例外的である。信じられないくらい広い庭があるのでヘリの離着陸に心配は要らないらしい、とコーディネーター。

私は五フィートにも満たず、体重も八十ポンド以下、プーヨーは六フィート二インチ、二百六十ポンドと私たちのテニスの試合を見て笑わぬ者はいない。

プーヨーに導かれ、玄関を覗くと、その新聞の堆積の様子は私の想像を絶していた。敷え切れない新聞の柱の、自重による有機的捩れはガウディの建築物を思わせぬでもない。開口部を見て女性器を連想しない者はいない筈だ。床や天井くらは露呈しているものと思っていたが、双方とも新聞で覆われており、天井は倒れ掛かった堆積が支え合うような構造になっており、それは文字通り紙でできた灰白色の洞窟であった。チビで痩せつぽの私でも、屈んでやっと納まる狭さなので、この中を歩ける大人のアメリカ人はそう何人もいるとは思えず、私を呼べというプーヨーの要請はそう突飛でもなかったのだ。小さい割には狭いところが得意ではない私は深甚たる恐怖を感じ、落盤を恐れながら、診察用のペンライトで足下

を照らし、可能な限りの速さで這うようにして歩を進めた。玄関から十五ヤードほど進むと右手に閉じかけた開口部があり、垣間見えるシンクの一部でそこがキッチンであることがわかり、患者はとうに調理など放棄していることが了解された。更に十ヤードほど進むと、元は階段であったのだろう、左上部へ登る穴と右に進む穴に分かれており、右へ曲がり、試しにペンライトを消すと、既に玄関からの明かりは届かず、漆黒の闇で、視覚が奪われると急に糞便の匂いが鼻についた。暫く進むと、突然拡がりのある空間に放出され、周囲の新聞の壁もなくなり、屈まず背を伸ばすことができた。ペンライトで周囲を照らし出すと、恐らくそこは居間のようなところで、新聞の堆積が進行中であることがわかった。つぶさに目を凝らすと、まだ膝の高さに満たない柱があり、今でも配達されている日々の新聞はここに積まれ、恐らくこの部屋が埋め尽くされていない最後の部屋であるに違いない。すると患者がいるところはあのスロープを登ったところしかない、と踵を返し、傾斜部分に辿り着くと、今度は実際に這って攀じ登らなければならなかった。二階に着くと左に進む十ヤードほどの穴を残す全ての空間は新聞で閉ざされており、右側の壁底部に大きな西瓜ほどの開口部があって、青白い足の裏がふたつペンライトの灯りに浮かんでいる。恐らくそこは患者の寝室であった

ところで、必要最低限の活動（つまり玄関から、日々の

3

The Honolulu Advertiser と、定期的に何者かによって届けられる水と食物を回収し、前者は何かの象徴としてこの家を埋め尽くすために積み上げ、後者はその行為が完了するまで摂取し続けるのであろう。水と食料は昔働いていたメイドのひとりに銀行口座が預けられていて、今でも月に二度、この任務が遂行されていることが判明した）に必要な部分のみ、新聞のトンネルでつなげられているのだ。

私と同じくらい小柄な白人の女を覆う新聞紙の穴は、私に、活動停止した動物を包む繭を思わせた。両足首を挿んで引き摺り出すと、痩せ細った老女は、極めてゆっくりとではあるが息はあり、顔面は蒼白で、腹部は膨隆している。腸閉塞の脱水性ショックで意識を失っているのである。手には旧い型の携帯を握っており、これで 911（救急医療センター）と交信していたのだ。携帯で、病院に閉塞部分摘出手術の準備を指示し（膨隆の位置から恐らく大腸全部）、プーヨーには、ヘリの機中で点滴とチューブによる減圧を施す旨連絡する。

ペンライトを口に咥え、羽交い絞めするように患者を背後から抱きかかえて、紙の管の中を外界に向け、後ずさった。

患者は住所からジュリー・キンケードと推定されたが、その後一九八五年十二月に脳梗塞で入院歴があることが判明し、バイオメトリクスから身許が確定された。

大腸は案の定、ほぼ全域に壊死をおこしており、選択は全摘しかないと思いつながらも、膨隆のひどさへの興味も手伝って、閉塞の度合いを見るために横行結腸の一部を切開し、私は息を呑んだ。通常は赤みがかっているのが灰色に変色し、黒い糜爛が点在する腸壁に包まれ、通常の五分の一ほどに狭窄した腸管はつい先ほど這いずり回った新聞の洞窟に酷似していたからだ。

切開部を凝視していると、アシスタントのナース、ナンシーに「メーガン、どうしたの？」と声を掛けられる。我に戻るが全摘の作業に移ることはできず、横行結腸に刺したままのメスをそのまま切り進め、下行結腸へと折れ曲がる。それは、まさしく先刻の、新聞で造られた内臓の中の彷徨の再現以外の何物でもなかった。「ドクター・リー！」、と職業的な呼称で呼び直すことで、私の正気を甦らせようとするナンシーの努力は省みず、The Honolulu Advertiser の堆積がジュリーのとおり存在の総体であるとしたら、恐らくほぼ同じ年月を経て閉塞を重ねたジュリーの肉体内部の迷宮も同様に違いない、と

いう確信に近付きつつあった。

私の目に見えるのは、新聞のトンネルと、病んだ内臓の相似だけだが、その入れ子のような構造は、私の人的知覚を越えて繰り返され、拡がり続けているに違いない、という直感が、私にこのメスによる彷徨を縫合し、ジュリーを新聞の繭に連れ戻せ、と告げている。

・編集後記：

今号は、本業が忙しく、休載しました。無理をしないのが大事。ながくつづける秘訣です。さつそく実行！

ドラメリア（編集長）

「文庫で森羅万象」作戦を展開している今回の話を取次（日販）の人にしたら、担当の中川清志さんが、ちくま文庫の全国売上ランクを作成してくださった。『思考の整理学』『命売ります』『新編教えるということ』『飛田ホテル』『とりつくしま』が上位だった。むろん定有堂にも在庫しているものだが、ここには脈絡がなく、定有堂のランクには「居場所つくり」という文脈がはつきりしているのが不思議に思われた。脈絡と狭さは一体なのだろうか。

奈良敏行（発行人）